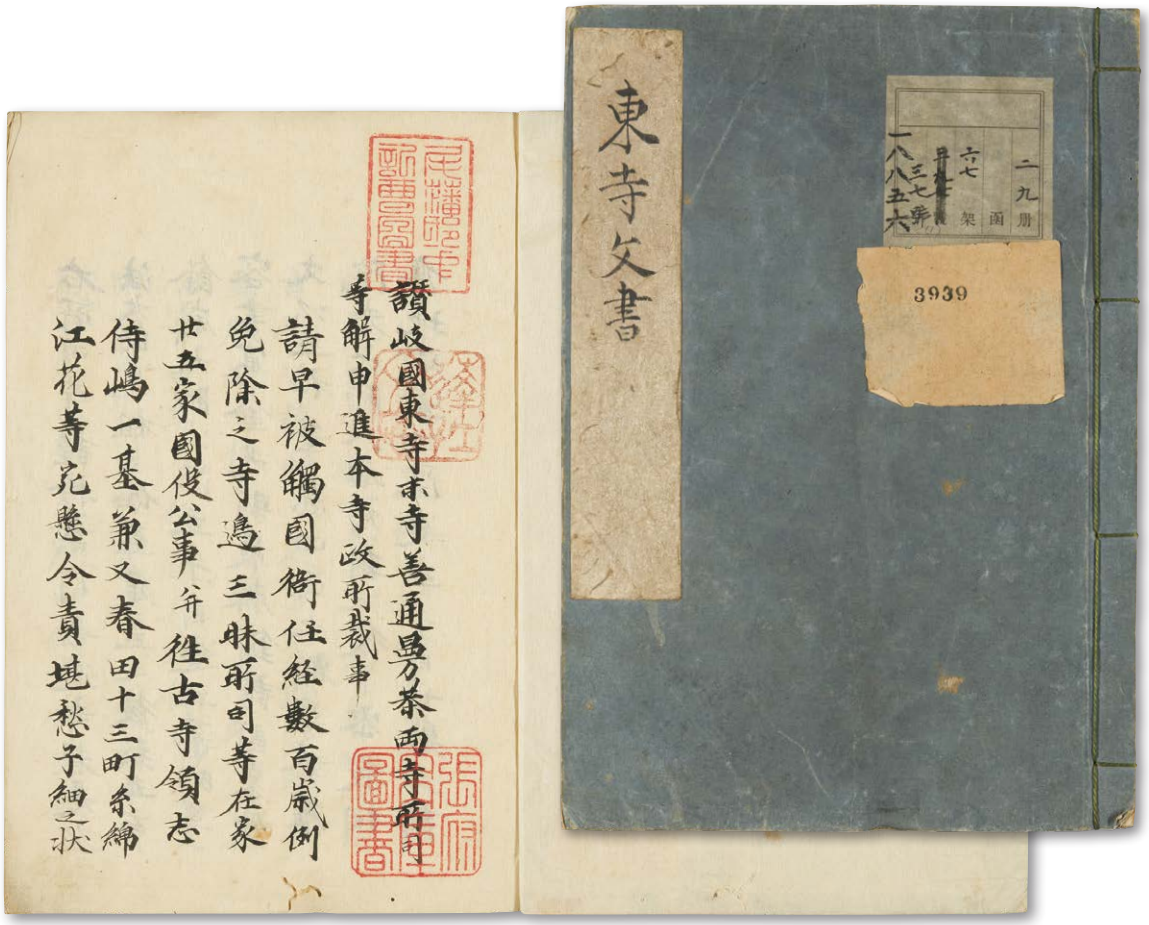
NO. 107

蓬古 HÔSA



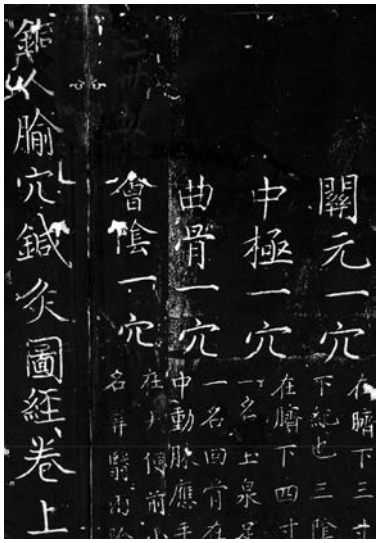
東寺文書

『銅人経』拓本を探る!?③

「天聖」という時代 ―『銅人経』の歴史的ルーツを探る

京都大学教授　辻　正博

本文庫が所蔵する『銅人腧穴鍼灸図経』（『銅人経』）は、明・正統八年（一四四三）の英宗御製序を冒頭に掲げる石刻の拓本である（「正統拓本」、図版）。これは、四世紀余り前の北宋・天聖年間に製作された刻石（「天聖刻石」）を模刻したものとされる。正統年間に製作された刻石（「正統刻石」）はすでに失われているため、本文庫所蔵の拓本はまことに貴重なものと言わねばならない。



「正統拓本」（部分。蓬左文庫蔵）

「天聖刻石」の発見

天聖刻石は、一九六五年から七一年にかけて行われた明代北京城の考古調査の過程で発見された(註1)。残石に「新鋳銅人腧穴鍼灸図経巻上」の文字があることから(註2)、刻石された書物の名がわかる。『新鋳銅人腧穴鍼灸図経』（『新鋳銅人経』）とは、新たに製作された人体模型（「銅人」）上に記された腧穴に即して針灸術を記した絵入りの書物、の意である。

『新鋳銅人経』の名は『宋史』藝文志に著録され、またその序文が『新刊補註銅人腧穴鍼灸図経』として伝存する書物中に見える。四代皇帝仁宗の時に活躍した夏竦の手になる序文には、翰林医官・殿中省尚薬奉御であった王惟一が勅命により針灸書三巻を新たに編纂するとともに「銅人」を製作したこと、『新鋳銅人腧穴鍼灸図経』と命名された書物は天聖四年（一〇二六）に仁宗に進呈され、王朝の出版物として刊行されたこと等が記される。銅人は二体製作され、帝都開封の医官院と大相国寺に置かれ、刻石も同時に立てられたという。

天聖刻石と正統刻石

天聖刻石はその後、歴史の荒波に翻弄され開封から北京へと移動したがその経緯は割愛し、ここでは正統刻石との関係を述べる。冒頭で、正統刻石は天聖刻石を「模刻したものとされる」と記したが、両者の関係は実は少々ややこしい。まず、書名が同じでない（天聖刻石は「新鋳」の二字を冠する）。次に、正統刻石は冒頭に英宗の序文を掲げるが、天聖刻石にそれは当然なかったはずである。行送りが両者の間で若干異なるのはそのせいかも知れない。文字の書きぶりも微妙に異なる。英宗が「（天聖時代から）四百余年を経て、石刻の文字は摩滅し銅人像（の文字）も読みづらくなった。朕は人命の拠りどころを重んじ、優品の継承さるべきことを思い、石を磨き銅を鋳造し、前作に倣って精巧に作り直すよう命じた」と記す如く、正統刻石は、天聖刻石を基に極力似せて作られたものなのである。

宋初の大文化事業

では、天聖刻石（『新鋳銅人経』）や銅人は、いかなる時代背景の下で作られたのであろうか。

唐末以来、中国では半世紀を越える戦乱の世が続いたが、十世紀後半、宋朝は乱世に終止符を打つとともに、中華文化の復興を天下に示す大

事業を矢継ぎ早に行った。上古から唐五代に至る中国の文化的営為を集成した「宋四大書」―『太平御覧』一千巻、『文苑英華』一千巻、『冊府元亀』一千巻、『太平広記』五百巻の外、経書とその注釈書、『史記』『漢書』などの歴史書、漢訳仏典を集成した「大蔵経」など様々な分野における学術的成果が、木版印刷術により「刊本」の形で世に問われた。医学の分野では、二代皇帝太宗の勅命により編纂・出版された『太平聖恵方』一百巻（本文庫が宋版を所蔵）が著名だが、これは医学各分野における知識・処方を国家が集成・整理したものであった。

「天聖」という時代

宋初の大文化事業は、豊富な資金とあまたの人材を投入して、唐代までの文学・史学・思想各方面の成果を全国各地から総動員して成し遂げられた。分裂時代の終焉がこの輝かしい成果をもたらしたに違いない。しかし中華統一の野望は契丹（遼）によって阻まれ、三代皇帝真宗の時代には些か退嬰的な空気が立ちこめた。国家の一大イベントとして行われた「封禅の儀（天地を祭る壮大な儀式）」には巨万の国富が費やされたが、次代への遺産はほとんど残らなかった。

その後を承けて乾興元年（一〇二二）に即位したのが仁宗である。即位当時十三歳であったため、皇太后劉氏が後見人となって政務を総攬し、真宗時代の政治を主導した江南出身の官僚（王欽若・丁謂ら、後世の評判が甚だ芳しくない人びと）が力を握った。しかし翌年、元号が「天聖」と改まるとそうした官僚はほぼ一掃され、のちに「名臣」として名を馳せる気鋭の官僚（呂夷簡・范仲淹ら）が頭角を現し始めた。これには仁宗自らの意向がある程度反映されている。

唐末五代の混乱を承けて成立した宋朝は、唐制の権威を借りながら、折々の必要に応じて制度を適宜改めて社会の変化に対応しようとした。ただ、その結果出来上がったパッチワークのような国制は、いずれ全面的に手直しせねばならなかった。天聖年間は、そうした国制に対する大がかりなリフォームが開始された時期であったと言えよう（最終の完成形は、王安石「新法」を経た神宗親政時期に出現する）。

たとえば法典。宋朝は建国直後に『重詳定刑統（宋刑統）』なる刑法典を制定したが、これは唐の最盛期に編まれた「律疏」（律の公式注釈書）を換骨奪胎したものであった。行政法典に至っては、唐令そのものを準用していた。この情況は、天聖七年（一〇二九）に「新令」（天聖令）が制定されてようやく解消され、宋朝は唐令の失効を宣言した。天聖令は一見、唐令と大して変わらぬように見えるが、同時期に作られた「附令勅」・『天聖編勅』（いずれも有用な詔勅をまとめた法令集）との三点セットではじめて機能するものであった。宋朝は、基軸となる律や令には大きなメスを入れず、新たな法典を附随させることで社会の現実に対応したのである。

史学に関わる分野では、天聖五年（一〇二七）に『三朝国史』一五〇巻が勅命により編纂された。王朝創業から仁宗即位の直前に至る公式歴史書が編まれたことからは、ここで時代にひと区切りつけようという為政者の心意気が感じられる。『国朝会要』一五〇巻の編纂も同様である。会要とは、諸制度に関わる重要資料を項目ごとに整理した書物であり、宋朝はこの後も繰り返し会要を編纂するが、『国朝会要』はその劈頭を飾るものである。

王惟一は『新鋳銅人経』の編纂に際して、「旧聞を纂集し、訛謬を訂正」することを旨とした。針灸学の分野でも、唐代までの学説がこの時期に整理され、一書にまとめられたのである。『銅人経』は、天聖時代の清新の気風をいまに伝える貴重な文献であると言えよう。

（註1）詳細は、于柯「宋《新鋳銅人腧穴鍼灸図経》残石的発現」（『考古』一九七二年第六期）を参照。なお、この時発見された五点の残石の外、一九八三年にもう一点発見されている。

（註2）真柳誠「経穴部位標準化の歴史的意義」（https://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper01/keiketsu.html）の図一一を参照。

伊藤満作とは

魚津社寺工務店 取締役営業部長 小山興誓

名古屋市蓬左文庫所蔵の『伊藤満作家資料』は、尾張の名工・伊藤満作の家に伝わった資料群である。そこには満作だけではなく、出身家の伊藤平左衛門家や、その縁戚で東本願寺や高野山などの造営にあたった大工の柴田家が関与した仕事の図面、文書が含まれている。

本号では、満作と平左衛門の関係を踏まえながら、伊藤家が全国的な名匠へと躍進するきっかけとなった京都の真宗大谷派本山である東本願寺造営参加の経緯についても見ていきたい。

まず改めて、伊藤満作について紹介しよう（図1）。満作は諱を守房といい、安政六年（一八五九）九月二十五日、伊藤平左衛門の初代清助宗知（一五七四―一六四一）の兄・九郎右衛門の系統で、平左衛門と同じ宮町（現名古屋市中区）に居住する伊藤九郎助の四男として誕生した。

図1　伊藤満作
（中区矢場町一之切）
『名古屋知名人士肖像一覧』
（中村写真館、1910年）
名古屋市鶴舞中央図書館蔵

その後、平左衛門八代守富（一八一四または一八一八―七七）の養嗣子に迎えられ、明治七年（一八七四）に家督を継ぐ。

しかし、明治十二年（一八七九）、実際に九代平左衛門を襲名したのは守富の姉・しうの子で、後に守富の養子になる守道（平作・平右衛門、一八二九―一九一三）であった。

次に、満作の主な経歴を挙げてみたい。

明治十三年（一八八〇）、守道が棟梁を務めた東本願寺御影堂釿始式に、釿納役として出仕。同十五年には愛知県の工匠会副総代に選出される。同十七年、皇居御造営工事御用を拝命。

明治二十六年（一八九三）、名古屋城が宮内省へ移管され、本丸などが名古屋離宮になると、その御用工を務める。

明治三十四年（一九〇一）、名古屋工匠組合の頭取に推挙される。翌三十五年には棟梁として、曹洞宗大本山永平寺（福井県吉田郡）の仏殿を再建。この仏殿は令和元年（二〇一九）、国重要文化財に指定された。

明治四十一年（一九〇八）竣工の大井村（現東京都品川区）伊藤博文邸への恩賜館（旧赤坂仮皇居御会食所、現明治記念館）移築や、隣接する別邸新築も担当し、大正三年（一九一四）二月七日に亡くなっている。

伊藤家では、東本願寺御影堂完成後の明治二十九年（一八九六）に帝室技芸員を拝命する九代平左衛門守道が著名である。しかし、満作の経歴を見れば、彼も近代を代表する全国的な名工であったといえよう。

また、満作は名古屋工匠組合において、自ら『工匠技芸之栞』を執筆し（図2）、組合員の指導にもあたった。その姿勢は、多くの門弟を育てた伊藤家の伝統を継承しているともいえる。

さらにそれは満作の子や孫が、平左衛門を襲名したり、大学の建築学科教授などとして活躍したりしたことにも通じている。具体的に見ていこう。

満作の没後間もなくして、長男の重平が二代満作を襲名することを発表した（『新日本』第七巻 第三号〈新日本社、一九一四年三月十五日〉）。

大正十一年（一九二二）一月には二男の次郎が平左衛門十一代（正道・守正、一八九五―一九

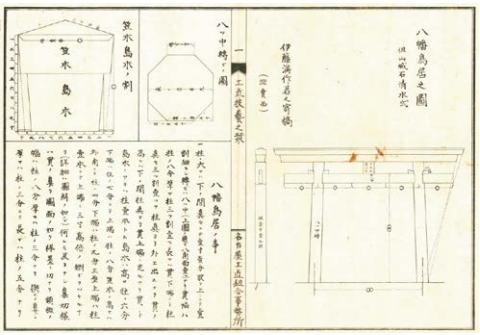


図2　伊藤満作君之寄稿
「八幡鳥居之図 但山城石清水式」
『工匠技芸之栞』
（名古屋工匠組合事務所）
魚津社寺工務店蔵

七六）を、その長男の要太郎（一九二二―二〇〇四）も昭和五十五年（一九八〇）に十二代を襲名している。伊藤要太郎は中部大学名誉教授でもあり、実弟で東京文化財研究所名誉研究員の伊藤延男（一九二五―二〇一五）とともに建築史の研究に多大な業績を残した。

三男の三郎（一八九七―一九八四）は、横浜高等工業学校（現横浜国立大学理工系学部）および中部工業大学（現中部大学）で、建築学科教授を務めている（「伊藤三郎先生を偲ぶ」『水煙会会報』第十五号〈横浜国立大学工学部建築学教室同窓会、一九八五年〉）。

なお、『伊藤満作家資料』は、三郎の長男で、名城大学名誉教授の伊藤三千雄（一九三四―二〇一一）が、平成二十三年（二〇一一）に蓬左文庫へ寄贈したものである。

次に、満作の出身家である伊藤平左衛門および東本願寺造営参加の経緯について紹介したい。

その家祖は伊藤清助といい、尾張藩祖徳川義直（一六〇〇―五〇）に従って名古屋に移住し、慶長十五年（一六一〇）から、藩の大工として名古屋城築城にも関与したと伝わっている。

伊藤平左衛門家としての初代は、その二男である清助宗知（先掲）で、以降代々、尾張藩作事方の御大工として、藩用を受けたとされる。

その後、二代藩主光友の寺地寄進（元禄三年・一六九〇）により開かれた真宗大谷派名古屋別院（東別院）では、元禄十五年（一七〇二）に三代の萩平左衛門源祐（一六四八―一七三三）が本堂を建立したのをはじめ、代々の平左衛門が棟梁を歴任している。

それに対して、同家が尾張藩作事方の御大工であったことを示すものは少なく、『伊藤満作家資料』に含まれる明治二年（一八六九）名古屋城内小納戸御役所の鑑札（木札）は重要である。

この鑑札以前では、天保六年（一八三五）に作事方御大工を仰せ付かったとの記録もある。

またそれは、十一代藩主斉温の命による尾張大国霊神社（国府宮）における天保九年（一八三八）十一月二日の拝殿上棟札に、「同（御作事）御大工／伊藤平左衛門藤原守之」とあることからも裏付けられる。

この守之は伊藤家七代義守（一七八一―一八五一）にあたり、文政五年（一八二二）十一月一日の名古屋東別院本堂上棟の功績により、歴代で唯一「信濃」の国号を受領した。

伊藤家歴代が手掛けてきた往時の伽藍は、『尾張名所図会』「東本願寺掛所」でも確認できる。

その威容は図会の中でも特に際立っており、伊藤家が名実ともに尾張を代表する大工棟梁であったことを物語っていよう。これは、『伊藤満作家資料』に何点か含まれる同別院に関する図面類からも十分に理解できる（図3）。

名古屋東別院本堂の遷仏法要は、上棟翌年の文政六年（一八二三）十一月十五日に厳修されるのだが、奇しくも同日に京都の本山東本願寺が失火により焼失してしまう。

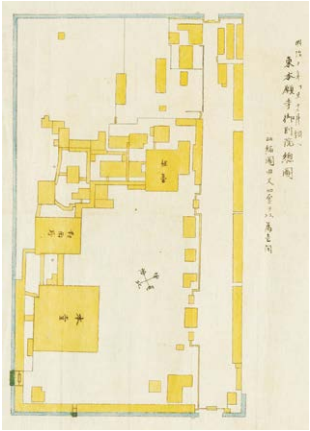


図3「東本願寺御別院総図」部分
明治10年（1877）12月調べ
蓬左文庫蔵

この時の復興は東本願寺文政度造営と呼ばれ、再建期間中における宗祖親鸞聖人像を安置する仮御影堂として、解体保管してあった名古屋東別院の元禄度旧堂が本山へ移築されることになった。このことが、伊藤家が東本願寺造営に参加するきっかけとなる。

工事には七代信濃守之と息子の八代守富が、天保二年（一八三一）八月の御影堂柱立まで従事した。

この造営期間中に、後に姻戚関係となる東本願寺肝煎大工の柴田家との仕事を経て、伊藤家は全国的な名匠へと躍進していく。

謝辞　本研究はＪＳＰＳ科学研究費助成事業（科研費）基礎研究Ｃ（課題番号：２２Ｋ０４５２６、代表：米澤貴紀）の助成を受けたものである。

伊藤家に関して、旦那寺である浄念寺前住職の故土方慶氏、水野耕嗣氏にご教示をいただいたことに、特記して謝意を表する。

俳諧懐紙と千鳥塚（後）

蝶羽・亀世兄弟の千句発起について、記録を丹念に追っていくと、その発起から十五年ほど後の元文六年（一七四一）と寛保二年（一七四二）に、千句とほぼ同義の「十百韻」という表記が登場する（いずれも亀世日記）。

・元文六年十月十七日　今夜銀涛、冬輔、鍋盛、和菊、和佶、鈴波（＝後の蝶羅）、風翁、和角、松洞、発句。十百韻之内百韻満巻。

・同年十月十九日　今夜銀涛十百韻興行有。鈴波ト行。

・寛保二年十月十二日　芭蕉忌非時スル。桃燕、正波、白之、文逞、銀涛、和佶、鍋盛、鈴波、歌仙満巻。十百韻続足。

芭蕉忌など、機会あるごとに句を詠み重ね、十百韻＝千句を目指していることを記す。

いよいよ石碑を建立することになる宝暦十四年（一七六四）の正月には次のようなことまで起きた。千代倉一統の恒例行事として、毎年正月二十五日に天神講の初会を開いていた。この年の初会は、当日百韻を目指すも、七十二句で打ち切りとなったため、翌日再度参集し、百韻を完成させている（亀世日記）。

・宝暦十四年一月廿五日本家初会有。和菊、鍋盛、鉄叟、亀相、亀光、亀章、東牟、和律、文河、文洲、蜻羽、〆十一吟。三千春（＝西尾氏、本陣職）少之内。蝶羅病気。七十二句ニて止。

・同年一月廿六日　昨夜百韻満巻不致ニ付、今晩手前へ、和菊、鍋盛、亀章、東牟、蜻羽、文洲、文河来、満巻。

このような地道な努力を積み重ねて同年末、ようやく千句に到達、埋納に至った。しかしながら、亀世はこの年の九月十八日、千鳥塚＝千句塚の完成を見ることなく、この世を去った。

年末の十二月十一日、「千鳥塚千句之清書今日出来」、細根山から「千鳥塚石碑」の塚移りをおこなった（和菊日記）。そしてその翌十二日、「今日芭蕉翁忌日ニ付、千鳥塚供養」「千句ヲ埋」と盛大に供養をおこなったのである。

石碑が千鳥塚に建った後、どのような状況となったのか、特に芭蕉忌にあたる十月十二日前後の記事を拾ってみると、以前との違いに気づかされる。明和三年（一七六六）から安永九年（一七八〇）まで、年次を追って列挙する。

・明和三年十月十二日　今日芭蕉忌相勤ル。千鳥塚へ蝶羅（＝東店初代）、蜻羽（＝栢木家二代目）、亀長（＝本町家六代目）、桂丈（＝可桂か、不詳）仏参スル。

・明和四年十月十二日　千鳥塚蝶羅仏参。誓願（寺）同道にて。此方（＝下郷本家）より花逞。

・明和五年十月十一日　今夕芭蕉忌相勤る。右百韻有。千鳥塚へ蝶羅、三千春（＝本陣職、西尾氏）、山父（＝本町家の分家、源十郎家初代）、君栗（＝後の学海）参詣。

・明和七年十月十二日　今朝御斎ニて、暁山和尚招請、せいがんじ（＝下郷家の菩提寺）仏参。ホソネへも参。千鳥塚へ蝶羅参。

以上は五代和菊、以下は六代学海日記から。

・安永四年十月十二日　今夜蝶羅所ニ而、芭翁忌有。隠居（＝常和＝和菊）被参。新蕎麦切。社中道斎（＝栢木家初代）、亀章（＝金剛家初代、学海の兄）、如羽（＝梅印家第二代、後の次右衛門）、常和（＝隠居、本家第五代）、山父、蝶羅〆六吟。歌仙有。今夕はやく被帰。今日昼、山父、隠居、才次郎（＝学海の息子）、供太吉、半五（＝この二人は下郷家の使用人）上下〆五人、上野道千鳥塚へ仏参、戻りにせいがんじへ参。

・安永九年十月十一日　十次郎（＝梅印二代目、後の次右衛門）、東五郎（＝栢木家の若者）、此面（＝金剛家二代目）、供友吉、千鳥塚よりかさ寺へ参詣。

本家・分家を問わず、老・壮・青さまざまに、千鳥塚へ「仏参」し、花を供えている。まるで千鳥塚が蕉翁のお墓であるかのようである。

おそらく追善の千句を石碑の建つ地中に埋納したことにより、小石を盛った単なる塚から、拝むべき蕉翁の聖蹟へと、昇華させることができたのではなかろうか。

蕉翁百年忌の寛政五年（一七九三）から二年過ぎた寛政七年のことである。本家当主は七代目の伝芳に代替わりしていた。伝芳は学海の甥にあたる人物で、寛政二年（一七九〇）に本家当主となってから、蝶羽、亀世、和菊など代々の短冊を改めた他、寛政四年（一七九二）九月に『俳諧千韻』を刊行

して成海神社、誓願寺、八幡宮、瑞泉寺へそれぞれ一部づつ奉納するなど、俳諧に深く関心を寄せる人物であった。

初夏も近い春三月下旬、京都からの来客が下郷家を訪ねてきた。伝芳は日記にかく記す。

・寛政七年三月二十一日　晴天　京都五条秋里仁左衛門殿と申方、（中略）是は都名所図会出板の人ニて、此度東海道図会出板の由ニて、当所古跡等記度旨頼被申候へ共、今日は客来旁断、上りの節委敷尋記候答にて帰候。

秋里仁左衛門は籬島（りとう）の号で知られる読本作者で、安永九年（一七八〇）に『都名所図会』を出版した。今ならさしずめ旅行ガイドブックとも言うべき書物で、大いに人気を博した。以後相次いで各地の名所図会の出版を手がけ、名所図会出版の第一人者となっていた。

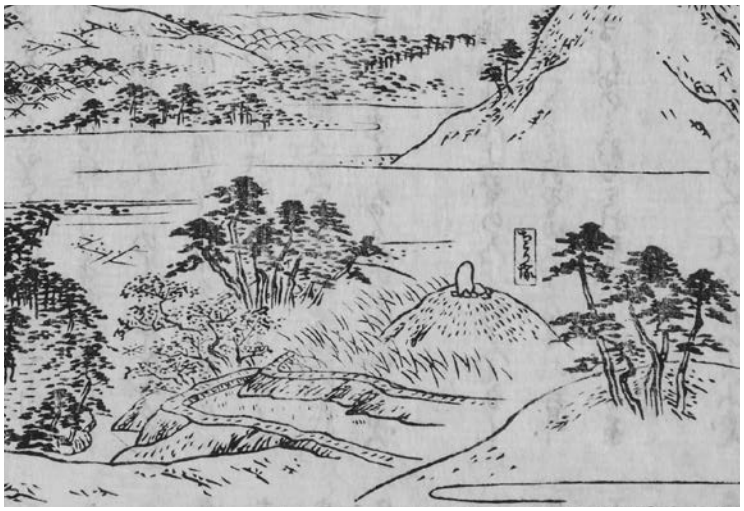
日記中に「当所古跡等記度」とある通り、来たる『東海道名所図会』出版のための現地調査が目的であった。このため籬島は江戸からの帰途に立ち寄ることとし、五月半ばに鳴海を再度訪れた（同じく伝芳日記）。

・寛政七年五月十五日　曇昼より雨降　京都秋里仁右衛門殿江戸登りニて、夜前宿や泊りニて入来。右は今般東海道名所図絵出来に付、当所古跡相尋申候ニ付、千鳥塚其外おしへる。手前にて翁笈、鼠灯台見せる。千鳥塚迄次右衛門案内。

鳴海の古跡について千鳥塚などを教示し、下郷本家が所蔵する芭蕉翁の笈、鼠灯台を見せている。そして、千鳥塚の現地は次右衛門に案内させた。この次右衛門は分家である梅印家の二代目で、なにかと本家を補佐し、如羽（汝羽とも）の俳号でもたびたび同家の日記に登場する。

こうした、鳴海での現地調査に基づき、寛政九年（一七九七）十一月刊行なった『東海道名所図会』巻之三には、千鳥塚を中心に東海道の宿場町である鳴海が次のように紹介された。

千鳥塚　芭蕉翁の句碑なり。山王山にあり。南は大洋渺々として、南勢朝熊嶽・野間の内海、あるいは三河の伊良虞崎まで遥かに見えわたりて、風景の地なり。すなはち当駅中千代倉氏に蕉翁自画讃の墨蹟を家蔵とす。その文に云く、ね覚の里、松風の里よひつきて、夜明て、からかさ寺はゆきの降る日　ほしぎきの闇をみよとや啼くちどり　はせを　この一軸を所持し、また蕉翁より譲られし笈文庫を家蔵す。この発句を石に鐫りて千鳥塚となづく。また発句の碑、笠寺境内にもあり。これより東に蕉翁の句を石に鐫りて近年多く立つるなり。



『東海道名所図会』巻之三　千鳥塚（部分）　蓬左文庫蔵

明らかに下郷本家での所蔵品観覧と千鳥塚の現地の状況をまとめた一文となっており、同行の絵師が描いた挿絵（写真上・部分）も千鳥塚である。石碑の建つその根元は土を塚状に盛り、その上部には小石を敷き詰める様子が細かく描かれる。小高い山王山の一角に建つ千鳥塚から西方を見下ろせば、麓には東海道の松並木が連なり、その西方には天白川が海へと流れ込む。

籬島来訪の翌寛政八年二月十二日、大高の元惺院（長寿寺の塔頭）で山口九郎左衛門（大高の酒造家で俳人（墨山）・篆刻家（余延年））の彫った蕉翁像の開眼供養が執り行われた。その折に刊行された句集『杉本尊』は伝芳が識文を書いている。伝芳の復刻した俳諧懐紙も同じく二月（花朝）刊であり、蕉翁追悼の一連の行事であったと考えられるのである。

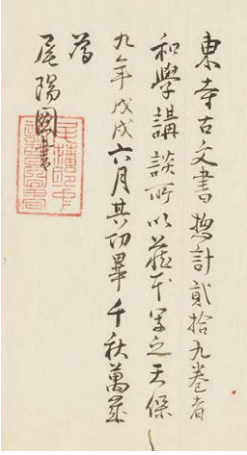
（元蓬左文庫　井上善博）

表紙：67-37　東寺文書（とうじもんじょ）　29冊　天保９年写　26.2cm×18.4cm

東寺文書

京都の東寺（教王護国寺）に伝来した文書類の総称で、東寺の法会仏事や荘園経営を中心とした寺院経済に関するものなど、古代から近世にかけての東寺の運営全般にかかわる内容の文書類である。貞享二年（一六八五）に加賀藩五代藩主前田綱紀が寄進した百の桐箱に収められた「東寺百合文書」もその一部であり、その他にも多くの「東寺文書」が各所に伝来、保管されてきた。

当文庫所蔵本は、この膨大な点数のある「東寺文書」のごく一部を収録した写本（全二十九冊）である。第五冊の奥書によると、和学講談所（以下、和学所）の蔵書本を写したもので、天保九年（一八三八）六月に計二十九冊を写し終えたと記されている。


東寺文書　第五冊　奥書

和学（国学）の講習兼編纂所である和学所は、奥州白河藩主松平定信の命によって書写された『東寺百合文書』（「白河本」、国立国会図書館蔵）を再転写した計三十冊の写本を所蔵していた（国立公文書館蔵）。このうちの第十八冊を除く計二十九冊を写したのである。

各冊巻頭には江戸市ヶ谷の上屋敷にあった御記録所（御日記所）の蔵書印である「尾藩邸中記書図書」、名古屋城内の御側御文庫（奥御文庫）の蔵書印である「張府内庫図書」が捺されている。また、元治元年（一八六四）頃に成立した江戸藩邸の文庫の蔵書目録である『〇印御書物目録』（「元治頃秘書目録」）の中に確認できることから、これ以降、遅くとも天保十五年（一八四四）に江戸の御日記所が廃止されたのに際して、御側御文庫に移されたと考えられる。

書写作業は複数人であたったのか、和学所本の目録順には行われておらず（例えば、当文庫本第五冊は和学所本の第六冊にあたる）、当文庫本には冊番が記されていないこともあいまって、和学所本とは冊順が異なっている。また、内容は和学所本を忠実に筆写しているが、朱字で字の訂正が散見される。ただ書き写したわけではなく、文意をとりながら写していたことがうかがえる。

御記録所が藩や尾張徳川家の記録を編纂するために行っていた膨大な資料収集の一端を知ることができる資料といえるだろう。

（蓬左文庫　亀井久美子）

【参考文献】
『愛知県史　通史編四』（愛知県、二〇一九年）
『愛知県史　別編　文化財四（典籍）』（愛知県、二〇一五年）
上島有『東寺・東寺文書の研究』（思文閣出版、一九九八年）

蓬左通信

令和五年度より研究が本格化した「銅人経」ですが、十二月に台北（国立故宮博物院・国家図書館）、三月に韓国（ソウル大学校奎章閣・国立中央図書館）で、調査を実施しました。

内容は同じでも、発刊（書写）された国・時代・来歴が多種多様なため、テキストを体系的に整理していく重要性を強く感じました。

また、リモートでの打ち合わせが多い研究チームのメンバーとも久しぶりに同じ空間で調査を進めることでき、非常に有意義な機会となりました。

（蓬左文庫　星子桃子）

ソウル大学校奎章閣での調査の様子

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023　名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　https://housa.city.nagoya.jp/　〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■**休館日**／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。
令和6年12月16日(月)～令和7年1月3日(金)は特別整理・年末年始により休館します。
■**展示室**／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）
■**閲覧室**／無料　館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第107号　☆令和6年6月7日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆年2回発行　☆印刷：菱源（株）